

市河万菴 いちがわ ばんさう 書家、篆刻家。天保九年(二月)二十一日江戸和泉橋通
生れ、明治四十年十一月十日歿(八三—一九〇七)。諱三兼、字叔井、通
稱昇六。万菴、万菴とも署す。市河米菴六十歳の折に生れた長男。祖
父は寛齋。分家して本郷森川町に住す。十一歳で書式砲術を學び、更
に江川坦菴、高島秋帆に就て新式を修む、先手鐵砲方となる。安政二
年海保醉茗に篆刻を學び、六年書道教授を始む。維新後大藏民部兩省
に出仕、明治二年以降大藏省の命により新紙幣の文字を書き、同省の
屬官二十餘年を及んだ。

同二年先考十三回忌追善の宴を江東中村樓に開き、參集者一千名を數
へたといふ。また當日の模様を記した冊子『金洞餘音』を作つた。四
十年の五十周忌には『米菴先生詩集』五冊を版して舊知に配布。長男
書家市河三陽、次男英詩學者市河三喜、三男林學博士市河三祿、一女
と華道池坊京匠と皆名を成した。少時書の門弟ごありた岡麓に入ひと
たびは米菴堂を見たかりしをさなきに今ものこれりとの歌がある。